

# 学級に生かす教育相談

- 教育相談センターとの連携から -

カウンセラー研修員 関根 伸幸（川崎市立菅生中学校）

## 主題設定の理由

今学校では、いじめや器物破損、喫煙といった反社会的な問題、不登校等に代表される非社会的な問題、さらには個別な教育的支援を必要とする子どもへの対応等、複雑多岐にわたる問題をかかえ、日々その対応に苦慮している。

全国的に見ても、小中高生がかかわった凶悪犯罪が紙面をにぎわすことが多くなったり、小中学生の不登校数が138,696人（平成13年度）と過去最高を記録したり<sup>1)</sup>、授業中立ち歩きじっと座ってられない子どもや、虐待を受けている子どもたち等の姿が頻繁に報道されるようになった。このような現状に対し、解決のために教員は必死になって取り組んでいる。また、心の教室相談員やスクールカウンセラーが配置され、子どもたちの心のケアに、より配慮するような取り組みをしている。例えば、普段の子どもの言動から心の揺れを察知し、一対一で向かい合ったり、あるいは教師と連携を図りながら問題の修復に努めるなどの活動がなされている。しかし、広範囲に及ぶ問題の中には、学校や家庭の力だけで解決するにはあまりにも問題が大きく、関係専門機関のかかわりや連携を切望している場合もある。

今回、教育相談センターでカウンセラー研修員として研修の機会に恵まれ、その業務内容を知ることができた。その中で、子ども担当の相談業務を体験する機会も得た。これらの体験から、学校での指導に教育相談センターが担っている専門機能を積極的に活用するためにはどのような連携を図ることができるのかというところに焦点を当て研修に取り組んだ。

## 研究の内容

### 1. 会議等を通して

教育相談センターでは様々な内容の会議や実習、講演会に参加する機会を得た。来所相談業務では、平成13年度150件を越える新規相談を受けているが、性格・行動に関する相談が最も多くその89%を占めている。中でも不登校の相談は相談件数全体の72%となっている<sup>2)</sup>。

教育相談センターでは、これらの相談に適切に対応をするため、相談担当者が定期的にかかわっている相談について、心理相談の専門家であるスーパーバイザーを招き、アドバイスを受けながら今後の相談の方向性を探り、よりよい相談ができるよう図っている。

そこでは、来談者本人や家族などの苦悩をうかがいながら、丁寧に相談していく担当者の姿勢が見られた。相談を継続していく中で、時には来談者の苦悩が怒りに変わり、それを相談担当者にぶつけてくることもある。その怒りを受けとめる辛い役割も担っている。そうすることによって来談者が自分のことをわかってもらえたという気持ちを持つことができ、そこから新たな相談が展開していく様子をうかがい知ることができた。しかし、そこに至る過程では、相談担当者が人知れず苦悩していることが多い。

---

1) 平成13年度文部科学省白書

2) 平成13年度川崎市総合教育センター事業報告書

諸富は著書の中で「自分の弱い部分も含めて、自分を語れる教師になれ」と述べている<sup>3)</sup>。体が弱くそれまでよそよそしかった来談者が相談担当者の怪我をきっかけとしてその存在を身近に感じてくれるようになったということもあったようである。このことは何も教師だけのことではなく、家庭においてもいえることである。

いつも完璧な親を演じ、弱い部分やだめな部分を見せないという親の前では、子どもも自分の弱い部分は見せられず必要以上にがんばってしまい、息苦しくなり疲れ果ててしまう。そんな子どもがある時、相談担当者の弱い部分を見て気持ちが楽になり、自分に向き合う決意をし、自分のことを話し出したということもある。

また、人とのかかわりがうまくできないという相談も多いように感じる。生活環境の変化に伴い、現代は幼少期に群れて遊ぶ機会が非常に少なくなった。このように体験の乏しさを負って就学する子どもが増えていることもその一因としてあげられる。さらに、子どもの発達に起因すると思われる相談も多くなった。

このような相談では、幼少期において人見知りがあったかどうかということが非常に大きな意味を持つことを学んだ。それは人見知りが認知能力の発達の点から密接な関係があり、母親と情緒的絆を結ぶことができる力を持っている証の一つであるということを知った。人見知りがいないということの背景には発達上の問題が隠れているのではないかと考えることができ、カウンセリングに加えて、効果的でより慎重で専門的な対応が必要であることを学んだ。

## 2. 講座や研修を通して

カウンセリングという言葉は日常的に聞かれるようになり、耳になじんだ言葉として定着しつつあるが、この実習に参加してカウンセリングの難しさ、奥の深さを改めて教えられた。

教育活動では主に助言や指導が中心である。教員は相談にきた生徒や親等に対して一生懸命意見を言い、アドバイスする。いわば、ガイダンス的傾向の強い活動である。しかし本来のカウンセリングは、来談者の話をしっかり受けとめる。来談者はそのやり取りの中で自分の気持ちが整理され、自ら解決の方向性を見出していくものである。

教育相談の研修では、相手の話を聴くということをテーマにして実習した。相手の心の動きを感じる。過去でも未来でもない今の心の動きを感じる。人が変化するのも現在であり、今この瞬間である。ということを実感しながら、全身で聴く、自分の価値観を出さないで聴く、今の話し手の心を肯定的に聴く、という人の話を聴く上で最も重要なことを改めて知らされた。

また、カウンセリングの基本は1対1の人間関係にあることから、相談担当者の人柄も重要な要素になり、それにカウンセリング技能が結びついて機能することを忘れてはならない。来談者が相手の暖かさを感じることで信頼が生まれ、隠された本心を語り出す。そして自分らしさを取り戻していく。

教育相談センターでは50分という限られた時間であるが、場所や時間という空間が確実に来談者に保障される。この人、場所、時間に対する安心感はカウンセリングをおこなううえで重要なことである。

ミニカウンセリング実習では、ロールプレイによるカウンセリング場面を録音し、後で自分の聴き方を振りかえりアドバイスをいただいたが、聴くことの難しさ、絶対傾聴の難しさを改めて実感することができた。特に来談者の話の中に必ずキーワードとなる大切な言葉があり、早くそれに気づくこと、その部分を整理して返すことの大切さを知り、単にオウム返しの対応ではないことを学んだ。

---

<sup>3)</sup> 諸富 祥彦 『学校現場で使えるカウンセリングテクニク』 誠信書房

自分自身、相談は得意なことだと思っていたが、このふりかえりから、話の途中でアドバイスをしてしまったり、相手の思考方向を限定するような発言をしたりしていたと気づき、反省することが多かった。学校での教職員は時間に追われる毎日であるが、子どもとのかかわりにおいて、ここで学んだことを生かす事ができるように感じた。

コラージュ療法も印象的な研修であった。子どもの中には自分自身のことをあまり良く理解していない子どもがいる。そして、自分で感じたことや思ったことがうまく言葉や文章で表現できない子どももいる。これらの子どもの中には箱庭やコラージュを通すことによって自分の思いや感情を素直に表現できることがある。

コラージュ療法は、不要になった雑誌の中から写真や絵など自分が気に入ったものを切り取り貼りつけていく。ザクザク切るという行為は、押さえられていたものを解放する爽快感を伴う。そしてバラバラに切り取ったものを自由に貼りつけていく。その時の自由な気持ちで貼り合わせていくので、どんな作品が完成するのか自分でもわからないという楽しみもある。

完成した自分の作品や他の人の作品を見て、心がどんな状態であるか、何を訴えようとしているのかがおぼろげながらも見えて大変興味深かった。

構成的グループエンカウンターやグループワークは、意図的に人との出会いを演出し、人とのかかわりを持たせようとするものである。新学年、新学期のスタート時や、クラス内の交流を活発に進めたい時等には大変有効な手法ではないかと感じた。

全くの気づ知らずであった人たちが知り合って言葉を交わし、ふれあい、協力することによって事をなし遂げるこのグループワークは、単なるレクリエーションとは違い綿密に計算されたねらいが存在する。そのうちの一つは、他者の意見を聞いて視野を広げるということ。二つ目は自分や他者の動きに気づくこと。三つ目は話し合いによるグループ決定の仕方を学ぶということである。自分から声をかけるのが苦手な子どもでもその機会が与えられ、少人数で話すことや行動することに抵抗がなくなり、自分に自信が持てるようになる。人との関係をとりづらい子どもの場合には、このような活動を通して人間関係づくりを学んでいくことも、一つの方法ではないかと思う。

### 3. 学校との連携

ベテランの相談員に相談しながら相談業務を担当した。実際に担当したので責任の重さに身が引き締まる思いであった。

子どもは小学生で、不登校にある。体を動かすことが大好きな子どもだったため、プレイルームでは野球やサッカーといった激しい動きを好んだ。非常にエネルギッシュな動きで、その動きにはついていけないこともあった。

ここでのプレイセラピーは1対1が基本になっているので、プレイルームが彼にとっては守られた自由な空間である。最初はプレイルームにあるおもちゃを一つ一つ手にとって決めかねていることが多かったが、2回目以降は私を引っ張り回すことが多くなった。

「これをやる。」と言って遊びはじめるが、数分すると「やめた、次。」と言って遊びを次々にかえてしまう。その動きは自分本位で、私の存在には全く関心を持っていない、あるいは払わないという様子である。これは、守られた空間でのびのびと自分の気持ちを表現できていると見ることもできるが、反面、遊び相手に対する配慮が全くない自己中心的な動きと見ることもできた。

回数を重ねるにしたがい、投げてもらって打つ、あるいは1対1のサッカーゲームと、道具やルールを工夫した相手との関係を保ちながら行う遊びに変化してきた。また、同じ時期に、相談時間の終了が

近くなると時計を見ながら寂しそうな表情をしたり，帰り際には手をつないできたりした。そんな時は強く手を握り返してあげた。その後帰る際には手を握ってきたが，しばらくすると今度はおんぶをせがむようになりプレイルームから母の待つ待合室まではおんぶをして戻った。この頃から相談の中でも手をつなぎたがる等スキンシップを求める姿が多くなり，遊びを替えるときも私に一言声をかけてくれるようになった。

このような形で展開した相談だったが，「登校し始めたらしいですよ」と親の担当者から聞いたときは大変うれしく，ぜひ続けて登校してほしいと思った。こうして学校へも行き，相談にも来所する生活が1ヶ月ほど続いた頃，担任の先生から相談室に連絡があった。その内容は「今後どのようにかかわっていったらよいのかお話を伺いたい」ということだった。

いろいろ考え悩んだ挙句に教育相談センターの扉を叩く親子が多く，本人や保護者の了解を取らずに連絡をとることはできない。学校との連携に難色を示すことが多いからである。このような場合，主に親の相談担当者がその意向を伺い，了解を得て学校と連絡をとることになる。

このような手続きを経て，本人や親の意向にそいながら可能な限り応じている。しかし「教育相談センターは守秘義務があり子どもの情報は一切教えてもらえないものだ」と理解している教員が多いことも事実である。私自身も以前は教育相談センターに通っている子どもは，学校から離れて通っているのだから無理に学校と関連付けられないほうが良いと考えていたくらいである。

学校でどのようにかかわることが本人にとってよいことになるのか等，その方向性をさぐるために話し合いを行う。そしてその後の指導に役立てるのである。

子どもの生活でかなりの時間を占める学校生活と切り離さなくて良いのであれば，それに越したことはない。不登校にある子どもが，集団への所属感を失わず，学校に少ない抵抗で戻っていくことができれば，現在社会問題になりつつある，社会的引きこもりも防いでいけるのではないかと考える。

母親が家庭で本を読み聞かせていた場面を親担当のカウンセラーに話した内容が，少年らしくとても純真な心情を語る場面であったため，それを伝え聞いた担任の先生も大変感動してくれたということがあった。

級友たちの前で見せる表情と，センターや家庭で見せる姿の違いを知ることによって，担任もそれまでとは違った接し方が工夫できるのではないだろうか。教育相談センターが学校と親子の間を取り持つことでよい方向に修正できた面談であった。

学校とセンターそれぞれで見せる様子の違いから，子どもはいろいろな場面によって様々な顔を示す。それを把握しておくことは，学校でのかかわり方に大変参考となる。限られた時間の中で大勢の子どもと接している教員は，一人一人の良い面をできる限り多く知ることが大変重要なことである。このような配慮によって子どもにさらに近づくことができるのではないだろうか。

教育相談センターは学校と独立している機関ではあるが，子どもや親が望む方法で学校との良い関係を探っていくところでもある。本人や保護者が望めば学校と連絡をとり，望まなければ学校には働きかけることをひかえるといった，一人一人を大切にす教育相談機関であることを改めて知った。

## 研究のまとめ

### 1. 研究のまとめ

不登校になる前や問題行動を起こす前に，子どもの心の揺れを察知して相談にのることや，クラスで人間関係づくりを行い対人関係が円滑に行えるよう自信が持てるようにかかわっていくことは教員の務めでもある。

対人関係の訓練ができていないまま就学することの多い現代の子ども達に人間関係作りを、体験を通して学ぶグループワークトレーニングで仲間作りを行い、コラージュ療法等で現在の心の有り様を知るなど、私たち教員は、子どもの問題が表面化する前の心の揺れを察知する力を持ちたい。

残念ながら学校にいけなくなった子どもにはスクールカウンセラーによるカウンセリングや、保護者・担任・スクールカウンセラー・養護教諭・児童生徒指導担当等を交えた援助チームで復帰につなげていく等の方法がある。そして学校に関連するもの全てを嫌う子どもには教育相談センター等、学校以外の機関に相談する方法もある。

教育相談センターは、受けた相談内容のうち必要とあれば、障害児教育研究室、精神科医、ゆうゆう広場、相談指導学級等とも連携しあえるというシステム上の協力関係がある。本人の状態と希望に応じて一番適した方法で対処しようとするのである。また、不登校の子どもにアプローチしていく不登校家庭訪問相談という方法もある。

不登校の子どもには学校や学校以外の関係機関とうまくかかわることで自分を取り戻し、1日でも早く自分らしく、納得のいく道を歩んでいってもらいたいものである。

学校は子どもの状況によって幾通りも選択できる道を把握しておき、いつでも活用してもらいたい。そして、教員もかわり方や方向性を持つうえで、管理職の了解を得た上でお互いに連携を取り合っていくことが何よりである。

問題が表面化してしまった子どもや不登校の子どもに対して素早く対応し、教員がその解決を図ろうと努力することは当然のことである。しかしながら、すべてを学校だけで解決しようとするには限界があるのも事実である。そのため学校が関係機関に協力を依頼することは当然の流れである。その際配慮していかなければならないことは、「学校が指導を放棄した」と思われないように日頃の生徒の指導に対して努力するのはもちろんのこと、事前に保護者への説明を十分に行う必要がある。

また教員だけで生徒のかかえている問題に対応できることには限界があることも意識し、それぞれの関係機関が持ち味を生かしながら、任せるべきところは任せるという意識改革を行い子どもの幸せのためにはいかに援助していったらよいかという視点で対処していくことが何より重要なことである。

一方、万引きをして補導された子どもの保護者が警察の人に「学校にだけは知らせないで下さい」と訴えることがあると聞く。自分の子どもが非行問題を起こし警察沙汰になったことをわざわざ学校に連絡したくないという気持ちは理解できるが、子どもの本質的な問題点を見失うと次にはもっと大きな問題を引き起こすことにもなりかねない。「学校に知らせる」のではなく「学校と一緒に考える」ことが大切で、子どもをいかに健全に育てていくかという視点で協力していく姿勢が保護者にも求められる。

学校は学校としての本来の役割を全うしながら、関係機関の業務内容等を把握し、問題によって連絡・相談すべき機関を適切に選択して協力し合う姿勢が学校として重要である。

## 2. 今後の課題

私は今回のこの機会に取り組んだ各種の研修や教育相談センターの業務に携わって大変勉強になったと同時に、自分の未熟さを思い知った。諸機関の業務内容を理解することなどを含めて教員の力量を高めることは、子どもの健全育成のためには大変重要なことである。全ての学級担任が諸機関の状況を理解することはなかなか難しいが、各種の研修の機会を増やして教員全体のレベルアップが図れればと思う。そして、学校や家庭が専門機関の持つ特性を把握することによって、よりスムーズな連携が図れるのではないかと。そのためには、教員の積極的な取り組みに負うところは大きいですが、研修等

への参加しやすい環境作りや，相談機関利用の仕方等を丁寧に紹介する必要がある。

最後になりましたが，この研修の機会を与えていただいたことに感謝するとともに，適切なお指導ご助言をいただきました教育相談センターの方々，及び勤務校の校長先生をはじめ学校教職員の皆様に心より感謝し厚く御礼申し上げます。

**【参考文献】**

富田 富士也	『きっと元気が近づいてくる』	柏樹社	1998 年
河合 隼雄	『カウンセリングを語る』	講談社	1999 年

**【指導助言者】**

川崎市総合教育センター研修指導主事	伊藤 一晴
-------------------	-------